

研究・調査報告書

報告書番号	担当
84	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
Gambling, disordered gambling and their association with major depression and substance use: a web-based cohort and twin-sibling study ギャンブル、障害性ギャンブルおよびそれらの大うつ病、薬物乱用との関連：Web にもとづくコホートと双子・同胞研究	
執筆者	
C. Blanco ¹ , J. Myers ² and K. S. Kendler ^{2,3*}	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Psychological Medicine (2012), 42, 497–508.	
キーワード	
アルコール、抑うつ、ニコチン、病的ギャンブル、双子	
要 旨	
<p>背景： ギャンブルの頻度および障害性ギャンブル（DG:病的ギャンブル[PG]を含む、ギャンブル関連の問題をすべて包括する病態）に及ぼす遺伝・環境要因については解明されているものは比較的少ない。</p> <p>方法： Web にもとづく抽出集団で以下の評価を完了した 43,799 人（609 の双子ペアおよび 303 の同胞ペアを含む）：生涯ギャンブル回数、PG の DSM-IV 基準、アルコール、ニコチン、カフェイン摂取、ニコチン依存（ND）と生涯大うつ病（MD）の DSM-III-R 基準。双子モデルは Mx を用いた。</p> <p>結果： コホート全体において、DG の症状が liability の最も重要な要素であった。DG の症状はカフェイン摂取とは弱く、MD・喫煙・飲酒・ND とは中等度に関連していた。双子および同胞ペアの検討においては、家族内でみられたギャンブル回数の類似は、家族—環境要因（$c^2=42\%$）、および家族—遺伝要因（$a^2=32\%$）の両者に由来していた。一方、DG 症状の家族内類似はもっぱら遺伝要因に由来していた（$a^2=82\%$）。Bivariate 分析によると DG 症状と MD との遺伝的相関は低い（$r_a=+0.14$）一方、DG 症状と遺伝要因との相関はアルコール、カフェイン、ニコチン使用および DN とにおいてはるかに高かった（$+0.29$ から $+0.80$）。これらの結果は性による違いを認めなかった。</p> <p>結論： ギャンブルへの参加は、環境・遺伝の両因子によるものであったが、DG 症状はほとんどが遺伝的な潜在因子により規定されており、内在化より外在化する行動様式との関連が強かった。この結果に性差を認めなかったことは、DG の病因は男女とも同様であることが示唆された。</p>	